



建築設備技術遺産

認定第 19 号 碍子(がいし)支持金具「アングラック」、配管用支持金具「パイラック」

管理者:ネグロス電気(株)技術部

所有者:ネグロス電気(株)

電力供給が都市部に広まるにつれ、大正年代(1910年代後半)には鉄筋コンクリート造の建物ではコンクリート打ち込み配管配線といった施工が行われるようになった。一方この時代の鉄骨材料は輸入が主体であったため、鉄骨とレンガによるビルが建設された。一般に工場などの広い空間の建築物は、鉄の材料が国産化され国内市場で容易に入手可能になる戦後の高度経済成長時代にならなければ広まらなかった。しかし、戦後になっても、わが国では、住宅は木造による建築が多く、電気の配線にはノップ碍子を用いた露出配線が広く用いられていた。1950年代の電気設備の配線金具類は、木造主体のものや金属配管工法であり鉄骨造に適した支持金具はなかった。なお、ノップ碍子を用いる露出配線工法はこの時代に開発された配線材料のビニル・ポリエチレン系の絶縁ケーブルの開発により衰退する。

鉄骨造は、構造部材である貴重な鉄材に穴あけや傷をつけることを考慮していないが、今回申請の支持金具が登場する以前の露出配線の施工では、碍子の取り付けに、ネジ止めをしなければならないため鉄骨を加工する必要があるため、施工法の工夫に大きな時間を割く必要があるため鉄骨造への電気配線の施工には不向きであった。

今回申請があった、碍子支持金具「アングラック」及び配管用支持金具「パイラック」は、この問題をネジで鉄骨に挟み込み固定する支持材で解決し、商標登録を取得した。これらの製品は露出配線の支持材取付けに鉄骨材を損傷させることなく、施工できることで、新しい建築構造空間における従来からある施工法との融合を果たした役割は大きい。また、ひとつの小さなアイデアは、ノップ碍子を複数取り付け可能な支持金具を生み、限られた場所に複数回路の露出配線を施工する課題も解決した。よって、小さな支持材料であっても、時代を読み解くことのできる建築技術遺産の認定に値するものである。



碍子(がいし)支持金具「アングラック」



配管用支持金具「パイラック」